

# 怠惰で傲慢なもう一人の王サマ

佐藤 終

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも、もうひとりキメラアントの王がいたら…

そしてそれがメルエム様とはあんまり似てない双子の王だったら  
という完全に自己満な二次創作です。

見切り発車でプロットもたてずに書いているため完結しない可能性が非常に高いです。

原作未読でアニメも一度さらっとみただけというにわか知識+処女作なため、至らないところだけだと思いますが、頂いた意見を元にどんどん改善していきますので、原作との設定の違いや、ここに表現違うだろ！もつとこうしろ！などのアドバイスをいただけると作者が泣いて喜びます。

目

次

プロローグ

プロローグ

一章／能力の開花

誕生、遠征

其れは唯、歓喜と畏怖の、途上也

14 6

1

# プロローグ

鼓動が聞こえる、心地良い、安心する、穏やかな鼓動だ。

聞こえる音は自分の音と、あとふたつ、ひとつは自分のすぐ隣で、我こそが王だと、確かな自覚を、いや…確信と自信を持ったまだ小さい子のものだ。

もうひとつは、どこか懐かしいような、ずっと聞いていたいような、言つてしまえば母性に溢れた、確かな鼓動だ。

自分と、もうひとりの小さな鼓動を、心配したり、嬉しがつたりと、忙しなく感情が揺れ動いている。

自分はいつまでもここに居たいと思った。

ここにいれば、時々、非常に美味しい食料が流れてくるし、非常に居心地が良い。

だが、自分の母らしき鼓動は、そんな自分の考えを分かつていて、如く、いざれ時が来れば旅立たねばならぬと、王にならねばならぬと、強く伝えてきているように感じた。

自分はそんな強い思いを、面倒だ。

そんな思いを持たずとも自分は大丈夫なのだと思った。

自分は怠惰で傲慢な王なのだから。

だからもう少しここにいてもいいじゃあないか… 面倒是この隣の「弟」にすべて任せて。

同胞が余の誕生を待ちわびていて、早く行かねば。

余が意識を持ち始め、最初に感じたのはそんな使命感というべきものだつた。

余を生み出し、今、余が強く在るために食料を流している存在が、そ  
う余に語りかけていた。

余はそれが、女王と呼ばれる存在だと知っていた、王を、兵たちを  
生み出すためだけの装置だと余が誕生すれば役目を終えるのだと  
知つていた。

その女王と呼ばれる存在は、我に王としての器を求めていた。

余はその返答として、愚問だ、それならもつと食料をよこせという  
意思をその存在に対して送つてみた。

その存在は笑つていたが、果たして伝わつたのか。

しばらくしてその意志が伝わつていたのか、食料の量が多くなつた  
ように感じる。

だが隣りにいるもう一つの存在のせいで、余に送られる量が明らか  
に減つているのだ、まあ稀に送られてくる非常に美味な食料はほとんど  
ど取られてはいないうなのだが…

度し難い事だ！この余から食料をかすめ取るなど、余が地に足をつ  
けた暁には真っ先に食料にしてくれる！

この隣りにいる存在は器はあるが、まつとうな王になる気はないら  
しい。

全くもつて気に食わない、器を持ちながら王としての責務を果たそ  
うとせずただ食料を食い荒らすだけ、これではただの蟲ではないか！  
此奴に余と同じ王としてのプライドは無いのか…

『はあ・・』

余はそんなことを思い、隣の存在に對して呆れて果てていた。

『ため息ばかりついてると幸せが逃げてくれよ?・僕の可愛い弟よ』

『いつも貴様はそんな脳天気なことを言つていて飽きないのか?それと余が貴様のような愚図の弟になつた覚えは無いぞ!』

『ひどいなあ、これでも一応君よりも早く覚醒していただれつきとした兄なんだけど…まあ、君がたとえ認めなくとも僕は君の兄のつもりだし、最低限兄としての威厳くらいは保つてみせるさ』

この様な問答は余が明確な意志を持ち始めた時に、それに気づいた隣の余の兄だと自称する存在に、思念のようなものを送られ、余がその思念に反応してから続いている。

問答はいつも余が呆れ返つて終わるのだが、思念を交わせば交わすほど此奴の事が理解できなくなつていく、何故そこまで楽天的でいられるのか、何故同胞達の訴えを前にそんなに呑氣にしていられるのか、本当に理解が出来なかつた。

もう、余らの誕生の時はすぐそこまで近づいているというのに…：

本当に面白い

それが僕が弟と会話した時に最初に思つた感想だった。

なんでそこまで同族に執着するんだろうとか、なんで王で在ろうと思ふんだろうとか、会話してみるとほんとに面白い子だつた!

弟が王を目指してくれるおかげで僕は頑張らなくていいし、僕はちょー楽ができるね!

そんなことをよく弟と語り合っていたんだけど、僕の考えが弟には

理解できないみたい。

まあ、余こそが王だー！それに比べてお前は何故そんなに一つて感じの子だし、理解できないのも無理はない。

でもやつぱり共感してくれる存在がいないつていうのは寂しいんだよね、僕が産まれたらまず共感してくれる存在を探そつと。

これでまた産まれた時の楽しみが増えたね！

あ、もちろん一つ目は弟をこの目で見ることだよ、可愛い可愛い僕の弟だからね、それを楽しみにするのは当然のことだよね！

なんていつも言つてたら、最近は諦められたのか説教みたいなのは無くなつた！ちよつと寂しい気もするけど、弟の説教は長いから諦めてくれて正直良かったかな！

『ん、そろそろ？』

『そうだな、余はもう我慢ならぬ』

つとそんなことを思つてると弟が痺れを切らして出ていくみたいだ。

弟はやる気に満ち溢れてるけど、僕はやだなーお腹も空いてるし

『もうちよつとこにいたかつたんだけどなあ』

『全く、此奴はいつになればこの怠惰を直すのか…』

そんなことを言い合いながら僕らは共に卵から出ようと力を込め  
る

ドクン、ドクンとこれまで僕らを守つていた卵が脈打つ

『あ、あ、あー!!まだよ！まだはやいい！』

「黙れ」

なんか耳障りな声が聞こえたから黙つてもらつた。

弟もイライラしてそだつたから黙つてくれて良かつたな、つと僕もから破るの手伝おつと

「せいつ」

僕と弟が力を込めると女王の甲高い悲鳴とともに卵が割れ、腕が殻をつきやぶり、地上に降り立つ。

その時の女王の悲鳴は、僕ら一人の王が誕生したことを知らしめる、産声のようだった。

# 一章(1)能力の開花

## 誕生、遠征

ハローー！

無事、僕達兄弟は産まってきたよー！

みんな勢ぞろいしててちょっとビックリしちゃった、でも考えてみれば当然だよね、王の誕生だもん、そりやあみんな集まるよね。女王の悲鳴もあつたし。

でもなんか変な感じだなあ、自分の足で立ってるっていうのは、なんだか疲れちゃうね！

「余は、空腹じや、馳走を用意せい」

「僕もお腹すいたなあ、ついでに僕の分もお願ひね？」

んー、みんなビックリしちゃつて動けないのかな？

誰も動く気配がないなー、困った。

お、と思つたら向こうから誰か走つてきた！

ペチ、ペチ、ペチ、ペチ

「女王様あ！ い、いかん内蔵がかなり損傷しておる！」

へえー僕らのこと無視するんだあ

僕はなんとも思わないけど、弟がもう殺すつて感じだね

弟くん、尻尾を振りかぶつてえー、ベチン、と容赦ないなあ

「生まれたてなのにもう身体の使い方覚えたの？早いなあ

「貴様が遅過ぎるだけだ、王の器ならばこの位は出来て当然であろう

？」

なんか殺したことに対するみんなビックリしてるみたいだけど、弟くんちよー無関心、これは王の中でもそうとうな暴君だね。

「二度言わせるな、馳走を用意せい……ここは薄汚いな」

「ほらほら、そんなグズグズしてるとまた殺されちゃうかもよ？この王サマに、ね？」

「「……」」

一同、沈黙…

なんで!? なんでそんなに黙っちゃうのさ? ビックリしてるの? 原因は分かるんだけど、そんなに?

「…おい、そこのお前、拭け」

わーお、こんな時でも唯我独尊と言わんばかりの要求を叩きつけていく僕の弟! そこに痺れる! 憧れ…はしないかな、うん。

「ふおつ、ふおつ、ふおつ、ふおつ、私め丁度ハンカチを持っておりま

——バチャ!

「二度言わすな、お前だ、拭け」

またやつちやつたかあー

つていうかその子のことすきなの? ほかの子でも良かつたじやんんー自分の意見が無視されかけた事にちょっとイラツとしちやつたのかな?

王だし、余の意見を無視するとは何事じゃあ! みたいな感じで。おつと?

「いくらお腹すいたからってそれ食べるのはちょっとやめといった方がいいんじゃないかな?」

「まずい」

「やつぱり?」

「うむ、やはり見た目どおりの味だな、余の馳走はどうだ?」

「「「…」」

「こちらでござります」

「お! やつとマシなのがきたね!」

「お食事のご用意が出来ております」

「これからは私共3人が、王の手足となり

「王の望むもの全て手に入れ

「王の望み全て叶えます」

「なんなりと、お申し付け下さいませ」

「おお! 感動だよ! 集まってきた子達を見た時はちょっと失望しちゃつたけど、この子達は格が違うね。」

「うむ」

「うん！」

いやあ！楽しみだなあこれからこの子達にどんなお願ひ事をしようか！ふふつ、こんなでも僕は王の一人なわけだし、弟くんの邪魔にならなきやどんなお願ひしてもいいよね？

タツ、タツ、タツ、タツ

ん？後ろから誰か追いかけてきてるなあ

廊下は走っちゃダメなんだぞー

「ネフェルピトーデン！女王のお命が危ない！御力を、貸して頂きたい！あの男を修復した力を！」

ふーん、あの子はネフェルピトーって言うんだ。

んーちょっとフルネームで呼ぶのは長くて不便だから縮めて：ピートーちゃんで！

次呼ぶ時はピトーちゃんって呼んでみよ！

「彼はねえ、僕にとつて必要だからやつたことなんだ。王が生まれちゃつたらさあ、彼女は僕らには関係ないんだ：あれはもう、いらないう♪」

「つー！」

おー、ピトーちゃんは王への忠誠心が相当に高そうだねえ、でもそれ以外のことに対する冷徹で、それは王の利になるのか、とかを考えてるのかな？

これは僕もちゃんと王様ムーブした方がいいのかな？威厳とかがないとお前は王として相応しくない！とか言われて追い出されそう

⋮

ま、今からそんなこと気にしてもしようがないか！

僕は基本このまま、時々気が向いた時だけ王様ムーブしていくこう！

！

弟くんがガチガチの王様！つて感じだから僕みたいなフランクな王様でバランスをとつていった方が、部下たちのストレスも軽減される…はず

そう！これは決してめんどくさいとかじやなく、部下のことを思つての行動だから！いやあーこんな部下思いの王様を持っててこの子達

は幸せ者だなあー！

この時前を歩いている王が、密かにため息をついていたとか、いな  
いとか：

「お食事は見晴らしのいい屋上に用意しております」

相変わらずよく気が使える子達だなあ、偉い！

「では、外から行く方が早かろう」

「そうだね、壁ぶち抜こつか」

「言われずともそうするつもりだ」

ここで罪の無い壁に、理不尽な暴力が襲う…！

ドゴォン!!

「お見事」

「おおー、やつぱさすが王サマだね～」

トコトコ、ザクツ、ヒュン

弟くんはそのまま屋上に行つちやつたっぽいね。

「あの…ご質問よろしいでしようか？」

「なんだいなんだい？金髪細身イケメンくん！」

「そ、その：何故、王が二人もいらつしやるのでしよう？」

「えつと…一人もいちやダメかな？」

「そ、そんなことは決して御座いません！で、ですが純粹に疑問に思つたのです。王は基本的には一人、と考えていたものですから、どうか浅学非才な我が身をお許し下さい。」

「ふふつじょーだんだよ、そんなにきんちょーしないでさ、ちょっと肩の力抜いてもいいと思うよ～

んーそれにしても何故、か。実は僕もあんまりよく分かつてないんだよねえー」

うーん、なんでなのかなー？こんなことを聞いてくるつてことはコレは普通じやないってことだよねえ…

偶然？たまたま？僕あんまり頭良くないからそんなことしか思い浮かばないや

「恐れながら申し上げます、私に心当たりが御座います。もし宜しければご説明させて頂けませんか？」

「おお！ナイスピートーちゃん、ちょうど困つてたんだよーつてことで『よし！任せた！ピートーちゃん！』

「おまかせ下さい。

「普フ、恐らく王は一卵性双生児だつたと思われる」

「なんなんだ…その呪文みたいな言葉は…！」

「一卵性双生児？」

「ああ、簡潔に言うと偶然途中で二人に分かれ、そのまま卵の中で育つていつた、ということさ」

「あー、そういう事だつたのか。

「ピートーちゃんの説明はとつても分かりやすいね！」

「何故そうちだと判断できる？」

「ほら、御方々は御顔や御身体がよく似ているだろ？これは一卵性双生児の特徴だ。

偶然、という可能性は限りなく低いだろうね、我々キメラアントは皆個性豊かな姿をしているからその中で似るということは、ほぼ確実に一卵性双生児と言つていいだろう

「へえー、ピートーちゃんはよく知ってるね！ありがとう、説明も分かりやすかつたしとつても助かつたよ」

「ありがとうございます」

「つとそういうことみたいだよ？普フくん」

「はい、とてもよく理解出来ました、お時間を取らせてしまい申し訳ございません」

「普フって呼ばれてたから、普フくんつて呼んでみたけど大丈夫みたいいだね、良かつたあ

「あ、そう言えば弟くんを待たせちゃつてるや

「気にならないで、じやあお腹も空いたし僕らも屋上行こつか」

「畏まりました」



ぱくぱく もぐもぐ

…ドゴオン！

いやー、まさかプロくんが楽器を弾けるとはね、とつてもいい音色  
だしリラックスしてくるなあ

今度時間空いた時にほかの楽器もできるのかとか聞いとこつと。  
んー、それにしてもやっぱりあんまし美味しいね、普通の肉  
じゃ

「弟くん！これあんまり美味しくない？」

「うむ」

「そうだよねえ、まだ胎児だつた頃も好き嫌い激しかったもん、弟く  
んは

「お口に合いませんでしたか？」

「うむ、酷く薄い」

「特に味付けなどはしておりますので」

「いや、そういうことでは無い。」

「あの女の腹の中で、極稀に、非常に濃厚芳醇な馳走が送られてきた  
の  
だ」

「ああー！レア物の事でござりますね」

「あのえも言えぬ充足感…余の身体が欲しておるわ。

あれを食すぞ」

「かしこまりました、では」

——ヒュウウ…ドオオン!!

「コホツ、コホツ：弟くん、もうちょっととゆつくり着地できなかつたの  
？砂ぼこりで前がよく見えないよー」

「煩い、そんなもの貴様ならどうとでもなろう。

そんなことより早くあの馳走を探すぞ」

「はーい」

そんなことを言うなり目の前の人達の頭を消し飛ばしていく弟く

ん

「なんだこいつらは、まるで手応えが無かつたぞ」

「人というのはキメラアントより身体が脆いらしくから、きっとそのせいじやないかな？」

「ふむ、そうなのか」

「不味い…ハズレだ」「不味い…ハズレだ」

人間つて不便だよね、身体は脆いし、繁殖能力も低い、その上進化も遅いんだからさー、中にはつよーい人間も居るつて知識があるけど…ほんとかなあ？

一応警戒はしといた方が良いかな、何が起ころるかまだわからんないんだし

おつと考え方をしてる間に弟くんが、脳みその方が美味しいよーつてピトーンちゃんに教えて貰つてるね。

ブォン！

「こうか？」

「お見事！」パチパチパチ

やつぱり流石の身体能力だねえ、弟くんは

さつきの人間を殺した時も、最初に頭を狙つたのは偶然じゃなく、本能的に頭が急所だつていうのが分かつてたんだろうね。

タツ、タツ、タ

もぐもぐ

「なるほど、悪くない…だが、食うには値いせぬ、レア物に比べればな」「恐れながら申し上げます、レア物を見分ける方法が御座います。

それを使えば

――バシイン！

「余を愚弄するか？目を凝らせば体を包むエネルギーが見えることくらい承知しておるわ、その多寡で判断するので有ろうが」

ああー、ピトーンちゃんが弟くんにいじめられてるー

今のそんなに怒ることかなあ？そりや侮つたともとれる発言だつたけど、純粹に役に立ちたかっただけだと思うんだけどなあ…

ピコン♪閃いた！これに乗じてピトーチyanの好感度を上げて、仲良くなろう！弟くんをだしにしてるみたいで若干気が引けるけど、これも仲良くなるための致し方ない犠牲なのです。弟よ…許せ…

「…大変失礼致しました」

「まあまあ、今のはちゃんとした理由があつて進言してくれたんだと思うよ？さつきだつて、人間の美味しいところは脳つてことを早く教えてくれたおかげで、早々にその事に気づけたでしょ？」

「ふむ、一理ある」

「つてことで、これからもこんな気づいて無さそうだなーって思つたら、早くに言つてくれると、僕も弟くんも助かるから、ピトーチyanも他の子もどんどん言つていこうね！」

「「はい！ 畏まりました！」」

其れは唯、歓喜と畏怖の、途上也

彼女、ネフェルピトーは待っていた。

「ふん♪ふん♪」

もうすぐ、王が産まれてくる！

ああどんな御方だろう？もうその時が楽しみで楽しみで仕方がない！

空想に描く、胎動の主を。

「機嫌が良さそうですね、ピトー何かいい事でも？」

普段、滅多に自分から喋ることの無いプフがこちらに向かつて問い合わせてくる。

まあ、プフも緊張してるんだろうねえ～

「いやあ、もうすぐだと思つたら楽しみでさあ。」

「確かにそうですね、ですが私は貴方達が失礼を働くかないか心配で：：楽しみと言うより不安の方が大きいですよ…」

プフは、時々馬鹿にしたような皮肉だけは普段から飛ばしてくる、まあ気にしてないけど…意趣返し位は、しても良いよね？

世界が変わる、瞬間を。

「そういう（）そ氣をつけた方が良いんじやないかにやあ？案外一  
番最初に不興を買うのはプフだつたりして」

「ふつ、有り得ませんよ。

少なくとも、貴方達に遅れを取る事は無いでしょう」

こんなこと言つてるケド、どうせ注意されたりしたらすつゞい動搖したりするんだよねえ

“……”

そして、遂に、君臨する。

——ツ!!

来た!!

「王の、誕生だつ！」

急いで身だしなみを整え、王の元へ。

どんな御姿だろうか？

どんな性格でいらっしゃるだろうか？

最初には何とお声掛けしようか？

自分は気にいつて頂けるだろうか？

歓喜、期待、不安…

様々な感情が彼女の中で渦巻いている中、左右で同じ様に足早で歩いている二人の従者、彼等も非常に似通つた感情を携えて、其の声を聴く。

「いくらお腹すいたからつてそれ食べるのはちょっとやめといった方がいいんじゃないかな？」

御声が、聞こえる…！

なんという美声、天井の楽器を神々が演奏したかのような、纖細で、澄んでいる。

こんな御声を最初に耳にできた者は幸せだ!!  
だが、この御方ともう一人、強烈なオーラを感じる…

ま、まさか…

「…不味い」

やはり！今回の王は御二人も居られるのか!!  
この御声、この存在感、間違えようがない。

王としての威厳、カリスマ、そして圧倒的な自信。  
我こそが王だと言わんばかりのオーラ。

とても、間違えようがない。

「やつぱり？」

落ち着いて、先ずは我々の存在を認識していただかなければ。  
だが、王が御二人となると、どうなってしまうのか？  
派閥ができ対立するのか。

この場で殺し合うのか。  
御二人で我々を統べるのか。

こんな事例は恐らくキメラアントとしても、我々が初めてだろう。

「うむ、やはり見た日どうりの味だな、余の馳走はどこだ？」

考へてもキリが無い。

すぐ隣に居る二人からも動搖を感じる。  
しかし、僕達のやる事は変わらない。

左右の二人とアイコンタクトを交わし、御二人の前に…

「こちらでござります」

先程まで緊張していたのが嘘のようだ。  
解つてしまつた。動搖していたのが、要らぬ考えをしていたのが、

全て無駄であると。

王が御一人か御二人かなど些細なことだつたのだ。  
御二人はきつと、そういつた次元では無い。

——僕達は唯、歓喜と畏怖に震え、お仕えする為にあるんだから。